

「鶏が鳴いた朝」

詩篇
ヨハネによる福音書

第14篇 2節～6節
第18章 19節～27節

説教 岡村 恒 牧師

まだ夜が明けきらない闇の中に、鶏の声が響きました。それは私たちの罪の闇に、神の赦しの光が射し込んだ朝の出来事でした。今ここにいる私たちのためにこそ、神の赦しを告げる鶏の声が響いています。

主イエスが裁判にかけられて、夜通し辱めを受けた朝方、カヤパの邸宅の入り口、たき火のそばで、イエスの弟子ペテロが鶏の声を聞きました。主イエスを知らないと言った三度目に口にしてすぐのことでした。

この夜、最後の晩餐の席上で、主イエスが弟子たちから去っていくことをお話になると、ペテロは命がけで主イエスと一緒にいくと断言しました。(ヨハネによる福音書 13章37節)この時、主イエスは「鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう。」(38節)と言われました。そして、いざ主イエスの裁判の場面で、「あなたもあの者の弟子ではないか」と問われた言葉に対して、ペテロは三度、激しく否定しました。

ヨハネ以外の3つの福音書を見ると、ペテロは鶏の声を聞くと、主イエスのお言葉を思い出して、「外に出て激しく泣いた」とか「思いかえして泣きつづけた」と記しています(マタイによる福音書 26章75節、他)。イスカリオテのユダは確かに主イエスを裏切りました。他の弟子たちも主を見捨てて逃げ出しました。主イエスの奇跡によって病気を治して頂いた人も、一人残らず主イエスを棄て去りました。そしてペテロも、三度、徹底的に主イエスを知らないと言いつつ、裏切りました。その時にすぐに鶏が鳴いたのです。人間は、弱い生き物だ。そんな話ではありません。このペテロの姿にこそ、主の十字架の意味、主イエスのお苦しみの本当の目的がはっきりと描き出されています。

神さまを神として、神の子を唯一の救い主として崇め、ひれ伏して歩みたいと心から願い、そう歩もうとしたはずなのに、自分の予想を越える出来事に遭遇しただけで、神さまに背中を向けてしまう。そういう人間の罪の姿がここに描き出されているのです。どうしても、神を自分の主として、自分の人生の中心に来て頂いて生きることができない、私たちすべての人間の姿が、ペテロに重ねられているのです。

しかしペテロは、この朝、鶏の鳴き声を聞いて

たのです。そしてこのペテロも、逃げ出した他の弟子たちも、やがて復活された主イエスと再会しました。甦られた主イエスは弟子たちと一緒に食事をなさいます。そこで主イエスは、ペテロに、「わたしを愛するか」と三度繰り返して問われます。ペテロは、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じます」と答えました。主イエスは、そのペテロに対して、「わたしの小羊を養いなさい」とお命じになりました。(21章15節～19節)

私たちの誰一人として、自分の力や懺悔の思いなどによって、主との関係が回復される者はいません。ただ主の憐れみによって、主に招かれ、呼びかけられて初めて、もう一度主のものとされます。ヨハネによる福音書は、ペテロの涙を記しません。ペテロが自分の裏切りを恥じ、悔いて主イエスの前に涙をもって進み出たので赦されたのだ、という思い違いを私たちがしないためでしょう。鶏の声に続いて、主イエスの受難と死、そして復活を記し、やがて甦られた主イエスの言葉を聖書は記していくのです。

ペテロをご自分のものとして取り返して下さるために、主イエスは十字架にお架かり下さいました。あの朝、鶏の声が響いた時、ペテロの側から主イエスに近づく道は、一切絶たれました。ただ主イエスの憐れみだけがペテロの赦しを、私たちの救いを実現して下さいました。

この日ペテロは、朝ごとに、鶏の声を聞くたびに主イエスのお言葉を思い出しました。鶏の声が響いた朝、それは、人間の側から神に近づこうとする一切の企てが崩れ去った朝です。私たちが自分の罪のために流す涙が、まだ一滴も流されないうちに、罪を赦す神の宣言が朝の空に響き渡ったのです。

ですから鶏の鳴き声は、私たちの罪を明らかにします。私たちの罪が赦されるために、神のひとり子の命が与えられねばならなかったほど、私たちの罪が〈赦されざる罪〉であったことを、明らかにします。そして、主の食卓につくたびに、私たちは魂の奥底で鶏の声を聞きます。主の十字架によって罪の赦しを実現されたことを告げる鶏の声を聞いて、主に感謝をささげ、御名を誉め称えるのです。朝ごとに、私たちの救いがこの世界に響き渡っています。

(記 岡村 恒)